

ドキュメンタリー映画
『母と子の絆～カネミ油症の真実』
の製作に向けて

藤原 寿和/稲塚 秀孝

最初に～自己紹介

【藤原 寿和】

- 1946年生まれ。早稲田大学理工学部応用化学科卒。
東京都環境局で40年間、環境行政、産業保安行政に従事。
1970年、「東京・水俣病告発する会」結成集会に参加
～一株運動、補償処理委員会追及行動などに取り組む。
1995年～「止めよう！ダイオキシン汚染」運動に参加
1999年～カネミ油症被害者自主検診調査団結成。
2002年 カネミ油症被害者支援センター発足。初代事務局
局長に就任。
2011年 台湾政府国民健康局から招待⇒台中県で5者
（国・自治体・被害者・研究者・支援者）による大討論
会開催⇒カネミ油症と台湾油症の調査のため、日台油症
情報センター設立

映画製作題材のカネミ油症事件とは

- 1968年、食品（ライスオイル）の製造過程で有害な化学物質（PCB、ジベンゾフラン）が混入して汚染し、その食品を食した数万人に健康被害（食中毒）が発生したいわゆる「食中毒事件」であり、同じく食品（粉ミルク）製造過程で有害なヒ素が混入した森永砒素ミルク中毒事件を上回る日本で最大の食中毒事件。
- 1970年代～80年代：患者団体が国、自治体、カネミ倉庫、旧鐘化（現・(株)カネカ）を相手取って大規模な損害賠償を求める集団訴訟。
- 1987年：最高裁で和解勧告を受けて全ての提訴取り下げ。
- 2008年～2015年：新認定者訴訟。最高裁で敗訴。
- 2012年：「カネミ油症患者総合対策推進法」成立

カネミ油症事件の真実とは

➤ ライスオイル製造過程でなぜPCB、ジベンゾフランが混入したのか？

①油脂製造会社による製造方法の問題、②熱媒体としてのカネクロール（旧鐘化製）を販売した鐘化（現・(株)カネカ）の不責任問題、③「ピンホール説」「工作ミス説」「両者原因説」をめぐる裁判過程での問題

➤ PCB、ジベンゾフランの毒性はいつ判明したのか？

①PCBメーカーの鐘化の責任、②PCBの熱変成によるダイオキシン類の生成の予見可能性、③1957年3月米国におけるひな鳥水腫事件、1968年日本におけるダーク油事件などの科学的知見の存在を鐘化も国も医学者の知らなかったのか。

➤ 何故、食品衛生法が適用されなかったのか？

➤ 何故、食中毒に診断基準が適用されたのか？

➤ 何故、被害者救済補償制度が早期に実現しなかったのか？

①訴訟取下げ問題、②仮払金返還問題、③劣悪な「救済・補償」制度のあり方問題

カネミ油症事件の根本的解決は？

- カネミ油症認定制度の見直し⇒カネミ油症被害者救済支援法（韓国枯葉剤戦友会、台湾油症救済条例など）
- 化学毒の継世代的影響の追求～次世代健康調査の課題
⇒⇒⇒「**へその緒プロジェクト**」発足と実行へ
- カネミ油症被害者に限らず、あらゆる「被害者」への差別と偏見の根絶
- 治療法の開発～エピジェネティクス創薬へ

カネミ油症の真実を映像で訴える！

タキオンジャパン 稲塚 秀孝

【自己紹介】

1950年生、北海道苫小牧市出身。中央大学文学部哲学科卒
1973年 株式会社テレビマンユニオン参加
1985年 株式会社タキオン創立、代表取締役
2012年 株式会社タキオンジャパン、現在に至る

■主な著書

- ・ NORIN TEN 稲塚権次郎物語: 世界を飢えから救った日本人
(2015/5/14)
- ・ 二重被爆: ヒロシマ ナガサキ 2つのキノコ雲の下を生き抜いて
(2014/1/15)

■主な映画作品⇒次のスライド参照

主な映画作品

- ◆「二重被爆」 (2006)
- ◆「二重被爆～語り部・山口彊の遺言」 (2011)
- ◆「フクシマ2011～被曝に晒された人々の記録」 (2012年製作・公開/86分/日本)
- ◆「書くことの重さ～作家 佐藤泰志」 (2013年製作・公開/91分/日本)
- ◆「仲代達矢”役者”を生きる」 (2015年製作・公開/90分/日本)
- ◆「NORIN TEN～稲塚権次郎物語」 (2015年製作・公開/110分/日本)
- ◆「奇跡の子どもたち」 (2017年製作・公開/80分/日本)
- ◆「憲法を武器として～知られざる50年目の真実」 (2017年製作・公開/107分/日本)
- ◆「ああ栄冠は君に輝く」 (2018年製作・公開/83分/日本)
- ◆「日高線と生きる」 (2021年・83分/日本)
- ◆「役者として生きる～無名塾第31期生の4人」 (2022年、90分)



ドキュメンタリーは告発！ カネミ油症映画製作の原点

- 1968年（昭和43年）、カネミ倉庫（北九州市小倉）が製造した食用米ぬか油に混入した、PCB（ポリ塩化ビフェニール）によって、日本最大の食中毒事件が引き起こされた。PCBの加熱によりダイオキシン類（PCDF）が生成され、身体に異変が生じた。皮膚疾患（巨大なおでき）、内臓疾患、強い倦怠感、高熱など・・・。
- 「カネミ油症事件」発生から55年（2023年）、今では1世から子、孫、ひ孫へと、被害の連鎖が続いている。なぜカネミ油症がおき、どのような世に、今を生きる世界の人々に伝え、訴える。

◆患者・家族の証言

福岡・長崎・広島など西日本を中心に全国に広がる「カネミ油症」被害者の証言を聴く。

◆原因を究明

なぜ「カネミ油症」が起きたのか？当時の報道資料を基に、映像の再現シーンを描く。

◆「カネミ油症事件」発生後の歴史的検証

原因加害企業（カネミ倉庫）と製造者企業（カネミ）の責任、国による救済、被害者への補償、「油症治療班」（九州大学）がどのように関わってきたのか？について、50年余が経過した今だからこその「真実」を伝えたい。そして「カネミ油症事件」は、日本のみならず、地球上に暮らす人々の共通の問題であること、公害として捉えるのではなく、新たな視点で捉える。

映画「母と子の絆～カネミ油症の真実」

- 母から子へダイオキシン類の毒性が流れたことの実証こそ、この映画を通じて皆さんに知ってほしい最大のポイントであり、被害者の認定制度という欺瞞を抜本的に糾すことにつながります。この点こそが、本映画の”社会的意味”であると確信しています。
- 「**へその緒プロジェクト**」のプロセスは映画の原点
- 半世紀以上たっても続くカネミ油症事件の真相を伝えるため、映画「母と子の絆～カネミ油症の真実」の製作にご支援をお願いいたします。
- ★**2024年秋 全国公開**⇒各地で「上映委員会」「キャラバン隊」を編成し、全国展開（上映と講演の集い）を行なう予定です！